

時の轍 Ruts of time

なかはらかぜ

I. 50年の轍

徳山大学創立50周年おめでとうございます。

50年といえば半世紀です。ひと昔前では人生50年ともいわれていました。長きにわたり物事を継続してくることは、大学運営に携わってきた多くの人たちの努力と継続の力の成果です。建学の精神に基づいた徳山大学ならではの教育と研究が、多くの優秀な学生たちを育て、社会に送り出してきたその成果として、誇るべき50年があるのだと確信しています。

まさに50年にわたる教育の轍が、学生たちや保護者の方々のみならず、地域や企業、そして周南市によって継承され守られてきたといえるのです。

II. 真夜中の轍

人々が歩き、踏み固めてきた道。時間とともに、その道は多くの人々の刻んだ歴史という轍になっていきます。

また、その時間は川の流れにも似て、過去から未来に向かって留まることなく過ぎていきます。わたしたちはたとえば船に後ろ向きに乗せられ、時間という川を下っています。後ろ向きに座っているので未来は過ぎ去る直前までわからないのです。遠く過ぎ去った上流の風景も時間とともに遥かにかすみ、記憶から次第に消えて、そこには川の流れだけが残り、それも歴史という轍にのみ込まれていくようです。

こうして自分の足で歩いてきた、暮らしに繋がっている実際の道もあれば、人生の道のりといった生きた時間に直接繋がっている心の道もあります。そして、どちらの道も切り離せないその人にとって大切なオリジンな轍でもあるのです。

かつて実家近くに仕事場を借りて作画の仕事をしていた頃、仕事が終わるのが深夜となり 200 メートル余りの距離を実家へと帰っていく日々が続いていました。田舎道ですので街灯も少なく真っ暗な道でしたが、おかげで満天の星を仰ぎながら帰るのが楽しみでもありました。

そのわずかな道のりは、小学校の頃の通学路でもありましたが、放課後に友だちと遊びまわっていたわたしたちのテリトリーの道でもありました。ところがこの道は、山陽道から分かれて美祢の伊佐を抜け、長門へと続く歴史ある街道だったのです。

そのことを知ってから、かつて多くの先人たちがどのような志や想いを胸に秘め、この道を踏みしめて歩いたのだろうか、と満点の星に見送られながら想いを巡らせるようになりました。自分の足元を見ながら、歴史を変えた人物も歩いたかもしれない、そう思うと深夜の帰宅が特別な意味を持って心を揺さぶるのでした。

この道はまた、わたしの祖父は魚屋を営んでいたので、たくさんの魚を積んだ自転車を押して歩いた祖父の轍でもありました。母が歩いて父のところにお嫁に来たのもこの道だと聞いたことがあります。毎日深夜まで絵を描き、帰っていく道にはなんと多くの轍が残っていることだろう……そう思うと、この目に見えない轍はこうして足の裏を透かして自分に繋がっているのだと感ずるのです。

Ⅲ. 夢の轍

人生には先人たちの多くの轍が残っています。それに足を取られ自分の人生が思わぬ方向へと向かい始めることはよくあることです。

わたしの場合は漫画家の手塚治虫さんが最初の轍でした。その轍は祖父の魚屋から始まります。

母はわたしが幼稚園の頃から、よく地元の映画館に子守を兼ねて連れていってくれました。抱っこされながら映画を見るのですが、どういうわけか時々アニメーションが上映されていました。劇場用アニメーションの歴史を考えれば

初期の東映動画でした。母が見たかったのか、わたしが一緒なのであえてアニメーションを選んだのか、それは母にいまだに聞いたことがないので実はわからないのですが、小学校に上がる前のわたしに大きな影響を与えたのは間違いありません。その時見たのは「西遊記」というアニメーションでした。わたしはそこに登場する主人公の孫悟空ではなく、仲良しの女の子の猿のキャラクターが大好きになりました。可愛くて健気で、無性にそのキャラクターを真似て描きたくなったのです。

祖父の魚屋には魚の値段を書くための小さな黒板と白墨(チョーク)がありました。お店に置いてあるお客さん用の縁台に、そのチョークを使ってひたすら女の子の猿のキャラクターを描いていました。やがて小学校に入学すると、子どもたちの間に漫画ブームがやってきます。

小学校低学年の頃に、祖父の魚屋から借家に引っ越したわが家は、国道を挟んで商店街に面していました。月に一度、この国道を脱兎の如く横切り向かう場所がありました。商店街の中にある本屋さんです。当時は月刊漫画雑誌全盛期でした。子どもたちは、発売日になると気持ちが沸騰し、頭の中は漫画のことで吹きこぼれそうになっていました。地方の町は東京より2日遅れの発売になります。本屋さんに駆けつけると、古い昔の商店のつくりそのままの、その奥のカウンターには、いつものおばさんではなく気難しそうなおじさんが座って本を読んでいた。どうもお目当ての漫画本はまだ到着してはいないようでした。本から目を上げることなくおじさんは、いま駅に受け取りにいつてるから、と面倒くさそうに説明しました。ご主人はどこかの学校の先生であるらしく、家が本屋さんなので仕方なく後を継いでいるものの商売としてやるつもりはまったくなく、店は奥さんが切り盛りしているのだと母から聞いてはいました。この人がそうなのか、と低学年でありながらも納得をしました。

子どもという生き物は、信じられないくらいのエナジーを秘めているものです。その本屋さんで待っていれば、やがておばさんが漫画本を運んでくるのですから一番に手に入れることができるはずです。その待つ時間が我慢できない

のです。駅までおよそ3キロくらいでしょうか、駅に向かってやや下りの商店街を走り、母に連れられていった映画館の前を通り過ぎ、踏切をわたり、やっと駅が見え始めた頃、向こうから見慣れた本屋さんのおばさんがリヤカーに梱包された新刊の書籍を積んでやって来るのが見えたのです。当時は自動車ではなく、狭い商店街をリヤカーで運んでいました。おばさんも漫画好きなわたしのことはよく知っておられたので、一緒に本屋さんまでリヤカーを押して帰りました。梱包された漫画本を開封すると、本誌、別冊が数冊、たくさんの付録が別々に小さく梱包されて入っていて、売る前に本屋さんがそれをひとつに組み合わせて、初めて店頭で並ぶことをこの時に知ったのです。無事にわたしはお目当ての月刊漫画雑誌を一番で手に入れて読むことができたのでした。

その時、わたしには自宅から本屋さんまでの道、そして本屋さんから駅までの道、漫画本に関わるふたつの轍を残すことになったのです。途中、母に連れられていったアニメーションを見たあの映画館への轍とも重なっていました。

ある時、本屋さんに到着してみると、確かに父からもらった本を買うためのお金がないのです。大切に手に握って駆け出してきたはずなのに、両手には何もありません。いつも何度も通っている轍に沿って戻ってみると、あるお家の玄関近くに吹き飛ばされたようにお札が丸まっているのを発見したのでした。やはり落としていたのです。自分の轍を追って探したからこそ見つけることができたのかもしれません。

そこまでして待ち続けた漫画本に掲載されていたのが手塚治虫さんの漫画でした。手塚漫画には日本中の子どもたちが熱狂しました。わたしも小学校の教科書やノートの端々に手塚漫画のキャラクターを落書きしたものです。何度も先生に叱られ、落書きを消さなければならなかったのですが、気がつくともまた懲りずに描いていたものです。あまりの落書きの多さに、母も教員室に呼び出され親子で意見されたこともありました。

大阪芸術大学に在学中に、アニメーションについて調べていた時、あの子ども頃に母と見た「西遊記」のキャラクターデザインが手塚治虫さんだと知りました。轍が繋がった瞬間でした。

ひたすらチョークで落書きをしていた女の子の猿と、教科書に落書きしていたキャラクターが同じ漫画家の描いたものだったのです。本屋さんへの道と、映画館への道も同じ道であり、そこには子どもの頃のわたしの轍がはっきり残っているのです。求めるものはこうして繋がっていくのだと実感したのでした。

IV. 縦積みの轍

わたしたちは歴史を学校の授業の中で、巻物のように横に長い年表として学んできました。確かに時間を川の流れに例えられるように、時間経過は長い河川のものであり、年表のように横にスクロールして考えるのがわかりやすいのです。そこに残った轍を見つめることで、歴史は記録されてきました。歴史を作ってきた先人たちの偉業も見えてきたのです。

しかし、自分たちが今、こうして先人たちの轍を踏み、存在していることを心で感じる時に、わたしは歴史が縦に積み重なっているような感覚になることがあります。地層の重なりや樹木の年輪のように重なった轍の上に立ち、それを踏み、歩き、生活しているイメージが強くなるからです。横ではなく縦に積まれた年表の上に立っている、自分の足の裏の下に歴史が積み重なっている感覚なのです。時を越え轍が繋がった時、わたしは強くそれを感じるのです。

V. 他の人の轍

漫画の仕事はコミュニケーションを必要とします。物語を考えるにはまったく白紙の中からは生まれてきません。きっかけとなる何かが必要となります。自分の中にあるものは、子どもの頃からの思い出や経験、それは友だちとのやりとりの中から生まれてきたもの、また親や祖父、先生などの大人から聞いた話が心に積もったものです。

自分の浅い経験値ではすぐに底が見えてしまい限界がきてしまうので、大人になってからはむしろ他の人の経験を聞いて、それを参考に物語を創造するこ

とが増えてきます。自分の貧弱な経験値だけでは説得力に乏しいものになってしまうことに気づき、自分でないものの中に自分を置いてみるのが重要になってきます。カメラを誰かの中に置くということで、まさに他人の轍をトレスしてみるのです。もちろんそのためには、いろいろな人たちとお話をさせていただき、取材のようなことも必要になるかもしれません。

わたしは運良く26歳の頃から30代後半まで、あるテレビ局でレポーターのお仕事をするチャンスをいただきました。情報番組のように全国の地域にお邪魔して、地元の方からお話をお伺いしながらその地域を紹介する番組から、山口県下の市町村を訪ねて、そこで頑張っておられる方々に地元を離れずこだわってお仕事をされている人生観をお聞きする番組など、インタビューメインのレポートでした。40代前半はジャパンエキスポ「山口きらら博」という大きなイベントに携わり、県民参加プロデューサーとして、同じく山口県下の市町村を参加要請を兼ねてお伺いしました。その説明会でも多くの方にお会いしてお話をお伺いする機会を得ることができたのです。同時期に同じようなインタビュー番組をFMラジオでも5年間させていただきました。その後、50歳で徳山大学に招かれるまでの数年は、やはりテレビ番組のお仕事をさせていただきました。山口県出身、またはゆかりのある文学者の住まれている地域を訪ね、その方に関わりのある方からお話をお伺いする番組でした。

これらのお仕事のおかげで何百人、いえ何千人という方々の人生を垣間見る機会をいただいたのです。当然ですがひとりとして同じ轍の方はおられないのです。そこから見えてくる人生と日々の暮らしが織りなす轍の素晴らしさに、物語を紡ぎ出す仕事柄、みなさんから多くの参考となる引き出しを与えていただいたのでした。

自分でないものの中に自分を置いてみることで見えてきたものは、平凡に見えても時間の積み重なったその轍には、実はその人にとっては素晴らしくきらめくドラマがあるということでした。

VI. 新幹線の車窓

新幹線に限らず鉄道は敷かれたレール以外を走ることができません。最初から決められた轍を走り続けるしかないのです。自動車のように道なき道を走ってみて新しい轍を刻む冒険はあり得ないのです。毎日同じレールを走り、同じ車窓を見ることしかできなくてもそこにはやはり大きな変化があり、ときめくドラマがあるはずです。

在来線はボックス席に後ろ向きに座ると、時の川を船で下る時と同じようにまだ見ぬ風景が背中から突然現れます。それは見えた瞬間に過去となり遠くに過ぎ去っていきます。決まった轍で未来から現在、そして過去へと運ばれていくのは、やはり時の流れを車窓は象徴しているからだと思うのです。しかし、この轍に興味を持ったのは新幹線からの車窓でした。

仕事で上京する時には余裕があれば新幹線を利用します。航空機の3倍の時間が必要ですが、車窓を楽しむには十分すぎる時間があるからです。わたしが新幹線の車窓に愛着があるのには理由があります。在来線と違って敷かれた当時から、最短距離で目的地に着けるようにと、ほぼ直線に近く線路が敷かれたために、本来なら出会うことのない風景が車窓に広がるからなのです。高架を伸ばし、トンネルを掘り、盛り土をして線路を敷き続けたからです。都会や街中だけではなく、田園風景を横切り、山脈の中を突っ切り、谷を跨いで新幹線は走り続けるのです。しかも時速200キロ以上の猛スピードです。確かに風景を満喫するには在来線の各駅停車や、ローカル線の観光列車が最適なのでしょう。しかしわたしは、今まで線路とは無縁であった風景の中に、突然敷かれて現れた轍によって巡り会えた一瞬の風景が大好きなのです。

山陽新幹線は、中でもトンネル新幹線と揶揄され、多くのトンネルを入ったり出たりしながら猛スピードで走ります。トンネルを出た瞬間に一瞬目の前に広がる、どこなのか皆目想像もつかない風景があり、前の駅があそこだったからきっとこの辺りは、と場所を推測している余裕もなく次のトンネルに新幹線は吸い込まれていきます。風景が見えている時間は短くて数秒、長ければ数十秒程度でしょうか。もちろん長く平野を走る時間もありますが、わたしはこの

数十秒の風景が好きなのです。トンネルを出て、次のトンネルに入るまでの間に、間違いなくそこに生活があり人の暮らしが広がっているのです。覚えるつもりがなくても不思議と目に焼きついてしまうのです。動体視力が優れているわけでもなく、記憶力にも自信はありません。しかし気になって仕方がないのです、今一瞬見たその風景がです。

狭い谷間の集落は、山の中腹あたりから棚田となって広がっていて、真ん中に見える曲がり下った道の両側にわずかに家々が点在しています。源流に近いと思わせるような細い川には、石の橋が架かっています。集落の一番高いところが学校だとみえて、横に長い校舎と小さな運動場があり、そこに集落を象徴するような立派な大きなイチョウの木が枝をいっぱいに広げています。森に囲まれてははっきり見えませんが、鳥居の石段の上にはお社らしい屋根がちらりと見えていて、この集落の氏神様かもしれません。ちょうどその森の影が、大きくこの集落にかかり始めた頃で、曲がりくねった道を帰っていく子どもたちが数名、声は聞こえはしませんが何かを喋りながら歩く姿まで見ることができたのです。何代にもわたって営まれてきた山間農村部の風景を、もし新幹線が通らなければ、わたしはけっして見ることはなかったであろう、と考えるとこの風景がとても愛おしく感じられて、この轍が与えてくれた車窓からの名画に感謝をせざるを得ないのです。やがて時を経てその轍は、わたしの中で発酵熟成され一枚の絵として発表されることになるのです。

VII. 船と航空機の航跡

船が苦手なのでほとんど乗ることはありませんが、瀬戸内海の渡船ならおだやかな日を選んで乗れば大丈夫です。船にも航路があり、広い海のどこを走っても良い気がします。航空路と同じく決められた道があります。航跡はまさに轍としてその道を見せてくれます。新幹線と比べてはるかに緩やかな船の速度は、ゆったりとした風景を船のデッキから見せてくれます。瀬戸内海であれば、港町、点在する島々、いき交う漁船、その美しい風景は海ならではの絵画のようで、何本もの轍である航跡も一枚の絵の筆跡のように感じられます。

海の絵を描く時に必ず必要になるのが、海に描き入れるこの白い航跡なのです。一枚の絵の中には時間はありません。むしろ時間を切り取った一瞬を絵にするといった方が良いでしょう。しかし、白い航跡を描き込むことで過去と現在が繋がるのです。または、揺蕩う波を表現できるのです。

しかし、水面を走る船と違い、高度も加わった三次元の航空機はもっと複雑な道を飛ばなければならないのでしょうか。見上げると飛行機雲がその美しい轍を見せてくれます。しかし、航空機は船のように自ら乗っている航空機の飛行機雲を見ることは難しいです。戦闘機のように自らが操縦しているのであれば可能かもしれません。しかしながら、轍だけを考えると便利なアプリケーションがあることを発見しました。スマホやタブレットでも利用できる世界中の航空機の飛行ルートから、出発到着地、航空会社から機種まですべてがわかるアプリケーションです。画面を開くと世界中でこれほど多くの航空機がリアルタイムで飛んでいることに驚きます。各国の都市部ではまさに航空路の大渋滞です。航空機の轍は美しい飛行機雲に目を奪われがちですが、見えない飛行機雲が縦横無尽に世界中を走っており、それがより速く遠くへと人類が求めてきた轍であることに気づかされます。空を描く時、海と同じように雲間に飛行機雲を描き入れます。これも空を横切っていく航空機の航跡であり、時の轍なのです。一枚の絵の中に、こんなところにも時間を表現するための工夫をしています。轍はそのために大切な仕事をしっかりとしてくれているのです。

VIII. 鳩の街と玉の井

子どもの頃から漫画を描いていた変わった少年ではありましたが、小説も欠かさず読み続ける図書館と本屋さんが大好きな子どもでもありました。今でもそうですが、現代が設定のリアルタイムな小説にはあまり興味がなく、国やジャンルはまったく問わないのですが、明治の文豪あたりから戦後にかけての昭和を象徴する作家が作品の中で見せてくれる、その時代の轍が好きなのです。

自分以外の中に自分を置いてみる、今の言葉ではバーチャル体験とでもいうのでしょうか、そのような楽しみ方が少し昔の小説にはあります。とくに轍を感じる作品については、現実に存在する場所が舞台となっていれば、その場所を訪れてみたくなるのです。これも今では聖地巡礼と若者がいつている現象と同じかもしれません。本来、漫画家ですのでその素養はあるかもしれません。

多くの作家の中でもこの数年あまり気になり再び注目している作家が、吉行淳之介さんと向田邦子さんです。向田邦子さんについては、主にエッセイの名手なので自分の文章の稚拙さを補おうと勉強させてもらうことが多いのですが、吉行淳之介さんについては戦後すぐの赤線地帯を舞台にした切なくも懸命に生きてきた女給たちの物語が胸を打つのです。吉行さんはまさに当時のカフェーの女給たちの中にカメラを据えて時代を描いた作家だと感じています。当時の赤線街を暗く淫靡な雰囲気でもなく、女給たちが背負っているものを、社会背景とくに戦後の日本にカメラを向けて、真摯に優しく描ける作家でした。

今でも残っている赤線街の名残があります。東京都墨田区東向島にある鳩の街商店街と玉の井地区です。上京して編集部での打ち合わせの後、何度か足を運びました。吉行文学の世界観を味わいたくての聖地巡礼ですが、訪れるたびに古い当時のカフェーの面影を残した建物は、古くなり耐震構造でもないの、更地か新しいアパートなどに建て替わっていました。昨年写真に撮ったはずの当時の面影のあった建物が、今年は突然無くなってしまっても、吉行さんが歩いていた、また女給たちが客引きをしていた道や四つ角はそのまま残っています。今は近所の主婦や子どもたちが買い物や通学で歩いているごく普通の轍が続いています。もちろんわたしにはその時代を小説の中からしか想像することはできませんが、赤線街の轍は時を超えて、戦後の時代の変化の中で振り回されてきた女性たちや、戦争で負った男たちの心の傷や、新しい時代へ変わろうとしている日本という国の不安定さをすべて包み込んで、いまだにこの商店街に落ちているように思えてならないのです。

IX. 絵画が成熟発酵する過程

新幹線の車窓から見える風景でも書きましたが、まず目に飛び込んでくるのは道です。道があり、そこから風景が始まります。作画に関しても、最初にグラウンドレベルを考えます。地面がどこにあるかということです。それが決まればそこに道を描き、川を描き込みます。まるで天地創造です。道と川ができれば、それに隣接して家を描き、人が生活を始めます。アダムとイブの誕生です。似たような街を作るテレビゲームもあったような気がします。

そのようにして次第に街や生活圏を広めていくと、風景画らしくなってきます。都会にするのか田舎町にするのかは、道具立てで決まってくるのですが、季節に合わせた配慮も加えていきます。最終的には、この風景画のどちらがわから太陽が昇り、やがて夕方になると三叉路の角の駄菓子屋の前の郵便ポストの影は、どちらがわにどのくらい伸びていて、そこを家路にいそぐ子どもたちがどちらの角から現れ、やがてそこで別れてそれぞれの子どもの家へと散らばっていく、そんな情景までを設定しながら描いています。絵描きとして楽しいのは、そのような風景の設計図を頭にめぐらせながら、それがカタチとなっていく制作過程なのです。きっとそれも、子どもの頃から見てきた風景が頭の引き出しに仕舞われていて、風景を描くたびにアウトプットされてくるのだと思うのです。どこに何が格納されているかは、正確なインデックスがないので曖昧ではありますが、その都度ある程度納得できる風景が描けているところを見ると、わたしの知らないところで有能な検索エンジンが働いているのでしよう。ともあれ、最初に大地を作り道を描く、想像の風景とはいえ、人の歩いた轍の残っていそうな、しかもそこに時の流れを感じさせてくれるような轍のある風景画を描きたいと思いつつも、まだまだ未熟なわたしはいつも自分の絵と戦っているのです。

X. カトリック教徒としての轍

まだわたしが洗礼を授かる前に、山口サビエル記念聖堂のある山口カトリック教会で勉強会に参加している頃、敬愛する神父さまが一枚のペーパーをみな

さんに配られました。そのコピーされたペーパーにはひとつの詩がプリントされていました。

「あしあと」(Footprints)というタイトルのその詩を読んだ時に、何かが心を揺さぶりました。というのも、この勉強会で神父さまが常にいわれていた「分かち合いの心」という言葉が少し理解できた気がしたからです。

あしあと、まさに轍です。心の轍であるかもしれません。アメリカのマーガレット・F・パワーズさんが書かれたこの詩は、数奇な運命をともなった物語となっていて、それが一冊の本としてまとめられ、太平洋放送協会から翻訳出版されています。Web上でも多く紹介されているので、ぜひ一読されることをお勧めします。

主である同伴者イエスキリストについて、これほどシンプルでわかりやすく語られている詩を他には知りません。実は心の轍として紹介した理由は、宗教や信仰に関わらず読んでいただきたい詩だからです。わたしたちの人生では親や兄妹、多くの友だち、愛する人、そして仕事で関わりのある仲間たちが存在します。この詩の主イエスの部分をそれらの人々と置き換えて読んでみると、互いが協力し合い、多様性を認め合い、困難や悩みに遭遇した時に互いの心を分かち合うことで乗り越えられる姿が見えてくるからです。わたしたちは決してひとりではないということなのです。道に迷っていた時に見えていたのは自分の轍ではなく、自分を支えてくれていた誰かの轍だということに、この詩から気がつくのです。

XI. 大学時代の轍

大学から寄り道しながら帰ってくると、もうすでに夕方になって駅に着くのですが、アパートまでは徒歩で約10分の距離です。狭く密集した路地を抜けていると、各家からの夕食の匂いが換気扇から吐き出されてきます。肉を炒める匂い、魚を煮る匂い、醤油の焦げる匂い、なんとなく献立がわかるような匂いが多く、大阪らしい関西弁で喋る家族の声まで、その換気扇からこぼれ落ち

て路地裏を埋め尽くしているのです。駅からアパートまで毎日歩く道は、家庭や家族を感じさせてくれる、少しホームシックな轍でできていたようです。

時には真っ直ぐにアパートには帰らず、彼女のアパートに寄ることもありました。彼女は熊本出身で同じゼミでした。絵も上手ではありましたが、それほど熱心に勉強している感じはなく、むしろお化粧品やファッションなどの話題に熱心でした。入学した最初の新入生歓迎コンパを大阪天王寺のお店でいったのですが、その時からわたしに人懐っこく話しかけてきて、一瞬で仲良くなったのでした。彼女には当然ながら同性の友だちも多く、4人くらいの女子グループにわたしひとり男子、そんなシフトで行動することが多かったのです。わたしの存在はけっして人気のある男子に取り巻きの女子、といった関係ではなく安全な男子として何かの時の相談役に置かれていたようでした。つまりは彼女たちにはそれぞれボーイフレンドがいて、彼とのことで困った時に男子の心理を確認するための存在として、それなりに重宝がられてはいたようでした。わたしも別段そのことには無頓着で、事実彼女たちのお喋りの渦中にあることは楽しくもありました。当時流行していたアイビーファッションを教えられたのも彼女たちからでした。

その日、彼女のアパートに寄った時に彼女からとんでもない告白をされました。それは自分には熊本にも高校時代から付き合っている彼氏がいるのだという発表でした。

彼女のアパートから深夜、大阪とはいえ住宅街です、人通りはなく街灯が冷たく感じられました。近鉄線の終電はすでに過ぎて、電車の通らない線路沿いをとぼとぼ帰るのですが、冬の夜風以上に、心に刺さった彼女の告白に胸がキリキリと痛みました。屈託無く明るい彼女だけに、不思議と怒気にはならず、漫画のような状況を妙に冷静に傍観している自分がいました。ショックではありましたが少しも彼女を恨む気持ちにもなれずに、いつも深夜に彼女のアパートから帰る同じ道ではなく、ただ何故か遠回りをするかのように電車からいつも見ている線路沿いを歩いていました。考えてみると初めて歩く道なの

に、いつも電車から見ているのと同じ風景の中にいるのです。そのような道もあるのだと、振り返って今歩いてきた、彼女のアパートから続く自分の轍を見していました。

XII. 繋がっていた轍

子どもの頃の祖父の魚屋から繋がっていた轍は、高校の美術部を経て、わたしの背中を大阪芸術大学へと押したのです。当時は画家としての道しか見えていなかったために、高校の先生方の勧めもあって油絵専攻を選び、美術館の学芸員資格を取得するために懸命に勉強をしました。アニメーションから漫画へと子ども時代に大好きだったものが、やがて芸術の分野へと昇華していく轍に、これがわたしに用意されたレールなのだと信じ始めていたのです。

しかし、わたしの目の前に敷かれていたものは芸術的絵画ではないことが、突然現れた友だち H によってはっきり示されたのでした。H はまさに漫画博士でした。わたしが読んで見て育った商業漫画とは違う、大阪という都会だからこそ目にすることができたメッセージ性の高い漫画が存在することを、その H から知ったのです。それは映画や演劇の世界でも当時の若者に支持されていたカウンターカルチャーの影響が漫画にも及んでいたものでした。H によって再び新たなる漫画の魅力に取り憑かれ、芸術への轍ではなく、漫画への轍を辿りながら歩くことになったのです。大学時代の2年間の新人賞への投稿を経て、やっと入賞することができました。漫画への轍は時を経て、いつも繋がっていたのだと確信することができたのは、入賞作品が掲載された漫画雑誌が書店に並んだ時でした。かつて低学年の頃に掌にお金を握りしめて漫画本を買いに走った商店街の本屋さんが、通常5冊程度しか並べないわたしの漫画が掲載された漫画雑誌を、なんと30冊も仕入れてくださっていたのです。しかも、しっかりと大きな包装紙の裏白に、郷土の漫画家デビューとマーカーで書いてくださっていました。今でいう、本屋さんの特別コーナーのポップ広告です。

わたしたちの周りでは、わたしたちが知らないところにも、またあえて目的を持ってそれを探し歩いていたりしても、多くの轍が時を越え、未来を見据え

て敷かれていることを感じるのです。そのためには、わたしたちは常に目を覚ましていなければなりません、自分に用意された轍に気づくように、そして見失わないように目を凝らしていただきたいものです。

徳山大学は、そういった多くの学生たちの夢や希望、将来への不安も含めて、たくさんの轍が縦横無尽に走り、時の流れの中で積み重なり、形造られてきた50年を迎えたのです。新たなる変革の時期に臨んで、この50年間の轍の上にさらに重ねられていく歴史に期待せずにはおられません。どのような轍がこれから刻まれ、徳山大学の次の50年を担う役割が、次世代の社会にとってどれほど期待に満ちたものになるかはこれからです。

今、それを前にして知財開発コースで、微力ながら短い轍を刻めたことに誇りを感じています。

おわり

【参考資料】

- ・手塚治虫(1996)『マンガの描き方』光文社.
- ・向田邦子(2006)『父の詫び状』文藝春秋.
- ・吉行淳之介(1966)『原色の街・驟雨』新潮社.
- ・マーガレット・F・パワーズ著、松代恵美訳(1996)『あしあと』太平洋放送協会.
- ・大川博(1960)『西遊記』東映動画制作.